台湾ヤミ族における親柱 tomok と「住まう」こと

THE MAIN POST 'TOMOK' AND 'DWELL' IN THE YAMI OF TAIWAN

足立 崇*, 西垣 安比古**

Takashi ADACHI and Yasuhiko NISHIGAKI

The Yami have the highly valued main post (tomok). This report attempts to elucidate the order of place in the Yami's dwelling main house (vahay) through the place (domavak) where 'tomok' is erected. For the Yami, 'domavak' is set as the original place to dwell between sea and mountain. We can understand that 'domavak' is founded on 'tomok' and mountain as the immovable center, and it is regulated by sea-direction and mountain-direction. At the 'domavak', the Yami are satisfied themselves of their center, and, at the same time, they stand on the tension between sea and mountain.

Keywords : *Yami, Dwell, Place, Center, Middle, Path*

ヤミ族, 住まう, 場所, 中心, 中間, 通路

1. はじめに

蘭嶼島は台湾の南端から東へ約 74km に位置する周囲 38.4km、面積 45.7km の火山島である。島の大部分は山岳地で、中央部には海拔 548m の芳蘭山が、東南部には海拔 480m の望南峰がある。島嶼にしては一年を通じて水量も比較的豊富な 9 本の川があり、それに沿って扇状地が発達しているが、そのほかの平坦地はいたって少ない。ここには台湾先住民族のヤミ族と呼ばれる人々が、山を背に海を望むことのできる扇状地に集落をなして住んでいる。ヤミ族は農耕、漁撈、飼畜を生業とし¹⁾、近年にいたるまでその伝統的文化をかなり保持して来た。蘭嶼島には現在六つの集落 (Imorod 村、Iratay 村、Ivalino 村、Iranumilek 村、Iralalay 村、Yayu 村) があるが、それらのうちで伝統的集落として保存されているのは Ivalino 村²⁾ と Iralalay 村のみである。

ヤミ族に関する本格的調査研究は 1897 年の鳥居龍蔵の人類学的調査がはじめである。以後、日本統治時代は台北帝国大学を中心に日本の研究者たちによって人類学、言語学、生物学、地理学などの研究が行われた。第二次大戦後は台北の中央研究院民族学研究所を中心に台湾の研究者たちによって人類学、言語学、生物学、地理学、社会学などさまざまな角度から調査研究が行われ、それぞれの分野で研究が深められてきた。一方、建築学における調査研究では、1934

年以降長年にわたり台湾先住民族の家屋を調査した千々岩助太郎の『台湾高砂族の住家』(1960) がある。これは当時のヤミ族の家屋を知るうえで貴重な資料である。近年では、林希娟『蘭嶼雅美族居住環境探訪』(1980) のようなヤミ族の住環境に関する計画学的研究や、方鏗雄『蘭嶼雅美族伝統住居建築之研究』(1984) のような家屋と自然環境との相関関係からヤミ族の居住空間を明らかにしようとした研究、黄旭『雅美族之住居文化及変遷』(1995) のようなヤミ族の住環境の変化を問題にした研究がある。また、乾尚彦によるアジア東南部やオセアニアの建築を視野においたヤミ族の建築生産および居住空間の展開に関する一連の研究、關華山や地理学者の三富正隆によるヤミ族の空間認識や世界観についての研究など興味深い研究も発表されている。

本研究は、これらの研究に多くを負いつつ、自らの調査をもとにヤミ族における「住まう」場所の構造を場所論的³⁾に明らかにしようとするものである。ここでいう「住まう」とは、人が意味づけられた世界において生きるその本来的な在り方のことである。本稿ではヤミ族の家屋のなかでも最も重視される主屋 vahay に着目する。主屋 vahay については上記の研究でも言及されているが、その中で多くの研究者たちによってよく指摘されるのは、主屋 vahay における親柱 tomok のもつ象徴的価値の高さである。本稿ではこの親柱

* 大阪産業大学工学部環境デザイン学科 助手・工修

** 京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻
助教授・工博

Research Assist., Dept. of Environmental Design, Faculty of Engineering,
Osaka Sangyo University, M. Eng.
Assoc. Prof., Graduate School of Human and Environmental Studies, Division of
Human and Environmental Studies, Kyoto University, Dr. Eng.

tomok を手がかりとし、親柱 tomok と「住まう」人との関わりあい
に発ち現れる場所の意味を読みとり、主屋 vahay の場所秩序を明ら
かにしていきたい。その考察に入る前に、まずヤミ族の主屋 vahay
がどのような家屋であるかを概観しておく。

2. 主屋 vahay の空間構成

(1) 方向規定

1) 海方向－山方向

ヤミ族にとって海方向 teylad、山方向 teyrala という方向は東西
南北といった方位より重要といわれており、家屋の棟向きや寝・食
における身体方向もこの方向によって規定されている⁴⁾。ヤミ族の
洪水神話では、海は住まいや人の命を奪う否定性を有した場所とし
て、山は海から逃れ生き延びる最後の依り処であり不動性を有した
場所として語られている。さらに、海の彼方には死霊 anito⁵⁾ の島や
天界があると信じられており、山は怪物のいる場所として恐れられ、
祖先の誕生した場所とも信じられている。このように海と山とは重
層的で両義的な意味を有しており、これらの意味は海方向と山方向
という二つの方向と結びついている。ヤミ族が「住まう」のはこれ
ら二方向のせめぎ合うその狭間である⁶⁾。

2) sarey 側－sekez 側

海方向－山方向に直交する方向として sarey 側－sekez 側がある。
sarey 側－sekez 側は日没側一日出側に対応するといわれるが、方
位が完全に一致している訳ではない。Ivalino 村、Iranumilek 村、
Iralalay 村では海に面して左側が sarey 側、右側が sekez 側であり、
島の反対側の Iratay 村、Imorod 村、Yayu 村ではそれが逆になる。
また sarey 側は男性の側、sekez 側は女性の側とされ、主屋 vahay に
おける寝・食では原則的に男性が sarey 側に、女性が sekez 側に定
位する。さらに、死霊 anito へ水芋・豚肉を奉献する manaod 儀礼
において、それらの供物を屋外の sarey 側に置くことなどから、sarey
側は死霊 anito と結びつく方向ともいわれる⁷⁾。

(2) 配置

1) 家屋宅地

家屋宅地は sako と呼ばれ、基本的に前庭 aorod、主屋 vahay、工
作房 makarang、涼台 tagakal によって構成されている(図1)。工作
房 makarang は vahay と同レベルに建てられた木造高床式の建物で、
漁具の製作や接客、子供達の就寝などに使われる。涼台 tagakal は
前庭 aorod に建てられた木造高床式の建物で、四方に開放されてい
るため、夏はここで涼み、接客や寝・食の場所としても使われる。
主屋 vahay の棟は海方向－山方向に平行になるように、工作房
makarang、涼台 tagakal の棟はそれと直交するようにそれぞれ建て
られる。かつては高倉 alilin、鶏小屋 vahay no manok、産屋 valag な
ども建てられたが、現在それらは見られない。前庭 aorod には丸石
と芝生が敷き詰められており、その一角には数個の背もたれ石
pananadngan⁸⁾ と魚を干す干竿 rarawan が立てられている。

2) 主屋 vahay

本稿の考察の対象である主屋 vahay は敷地を 2 m ほど掘り下げ
て建てられた木造地床式の建物で、地上からは屋根面しか見えない。
一般に小規模のものから大規模のものへ建て替えていき、出入り口
の数によって形式や名称が異なる。ヤミ族は結婚後に夫の居住地近
くに住むのを原則とし、最初は利用可能な土地で、valag という 1

門または 2 門の vahay を建てる⁹⁾。その後、家族構成の変化や資力
に応じて nijingjing と呼ばれる 3 門 vahay や cinangbadan と呼ばれる
4 門 vahay を建てていく。vahay 建造に際し執り行う主屋落成礼
mivaray はヤミ族の建築儀礼のなかで最も重要なものである。主屋
落成礼は客に対して大量の水芋や豚肉を分配しなければならないた
め、それ相応の資力のあるものでなければ行うことができず、3 年
以上も前から準備しなければならないといわれる¹⁰⁾。この主屋落成
礼は 3・4 門 vahay の建造に際してのみ行われる。ここに 3・4 門
vahay の重要性が窺えるが、ここでは vahay の完成形とされる 4 門
vahay について概観する。

4 門 vahay (図2、図3) は cinangbadan あるいは apat so sesdepan
と呼ばれる。cinangbadan は「tangbad を有する」という意味で¹¹⁾、apat
so sesdepan は「四つの入り口」という意味である。

4 門 vahay は前廊 sesdepan、前室 doespanid、後室 dovahay の三つ
の細長い室によって階段状に構成されている。後室 dovahay には親
柱 tomok が建てられており、tomok を境に板間と土間とに分けられ
ている。また、こうした室と別にそれぞれの門に対応する場所にも
名称が与えられている。4 門 vahay の場合、それは dosarey、domavak、
do espanid (dobosongaran)、dosekez という名称である。dosarey、
dosekez は sarey 側－sekez 側にそれぞれ対応している。domavak は
「中心・中間 avak の場所」という意味で、sarey 側－sekez 側の境
界にあたる。ここは通常の寝・食において家長が定位し、親柱 tomok
の位置する重要な場所である。do espanid (dobosongaran) という場
所は 4 門 vahay になってはじめて形成される場所である¹²⁾。

炉は二つ設けられており、それぞれ用途が異なる。dovahay の
dosarey に設けられる raranugan は飛魚やシイラなど回遊魚を調理す
る炉で、doespanid の dosekez に設けられる rarapuyan はそれ以外の
魚介類や芋、豚、山羊、鶏などを調理する炉である。一般に raranugan
はその使用に男性が責任を負い、rarapuyan は女性が責任を負うと
される。

本稿で着目する親柱 tomok は、3 門 vahay から建てられる棟持柱
で、三味線の撥のような形をし、前面には山羊の角 ozon no kagling
が彫刻されている。tomok は「vahay の靈魂」pahad no vahay ともい
われ、基本的に長男が継承し(父親の意志により変更可能)、遺産
相続などで家屋を分解して兄弟で分配するときも、tomok だけは敷
地を離れることがなく、焼却処分にもされず、朽ち果てるまで敷地
内に放置されるという¹³⁾。4 門 vahay には tomok が二本あり、大き
さや名称が異なる。dovahay の domavak に位置する大きい tomok は
rakorako a tomok と呼ばれ、儀礼をともなつて製作されるのに対し、
dovahay の do espanid と dosekez の間に位置する小さい tomok は
aliyalikey a tomok と呼ばれ、儀礼をとまわず他の部材と同様に製
作される。rakorako は「大きい」を意味し、aliyalikey は「小さい」
を意味する。ここでは便宜上、それぞれの tomok を大 tomok、小
tomok と呼んでおく。

3. 親柱 tomok をめぐる主屋 vahay の場所秩序

(1) vahay における奥行きと内・外の場所秩序

通常ヤミ族は他人の vahay を訪れるとき、前庭 aorod の上から
vahay に居る人に呼びかけ許可を得てから入る。ただ、たとえ中に入
ることを許されたとしてもそれは sesdepan までといわれる。こ

れは aorod が他者も許可なく入れる領域で、sesdepan がそうした他者を迎える接客の場所であることを示している。sesdepan から奥に doespanid、さらに dovhay と室が続くことを考えれば、sesdepan は内部と外部の中間的な領域といえる。4門 vahay では sesdepan、doespanid、dovhay と奥に行くにしたがって閉鎖的で内的な領域となる。それは、「vahay の霊魂」ともいわれ代々継承されて祖先とも関わる親柱 tomok や、ヤミ族にとって神聖な魚である飛魚などを調理する炉 raranugan が、vahay の最も内奥の場所 dovhay に設けられていることにも窺える¹⁴⁾。

Ivalino 村の創世神話では、こうした主屋の奥行きや内・外の場所秩序を知る上で興味深い話が語られている。それは Iraralay 村の Si-Zogzog という男が、かねてから考えていた自分の娘の結婚を成就させるため、娘を連れて Imasik 村の Siaman-Keynaban という男の vahay を訪れたという話である。少し長くなるが、その部分を引用する。

Si-Zogzog が言った「これが私が話していた娘だ」。

Siaman-Keynaban たちは vahay を清掃した。手伝い人の顔はまるで焼けたように黒かった。彼らは門のところに整列した。「友達よ、娘と一緒に入ったらいい」 Siaman-Keynaban はそう言い、息子を tomok の後ろに隠した。「分かった。しかしどこから入ればいい。」「dosekez から入ればいい。」「Si-Zogzog が dosekez に歩み寄り、そこから中をのぞき見ると中は煤のように暗かった。娘に言った「私たちは怪しいところにいるようだ」。

Si-Zogzog と娘はまだ門のところに立っていた。「どうしようか娘よ。帰ろうか。」「Siaman-Keynaban は留まるよう言った「もし君たちが dosekez から入りたくないなら、do espanid から入ったらいい。」「Si-Zogzog と娘は入ろうとしたが中に黒い魚のよ

うな人がいた。「これは怪しいぞ、娘よ。」それから娘とともに引き返し、入り口のところにたどり着いた。そのとき、Siaman-Keynaban は言った「友達よ、まだ帰るな。domavak から入ったらいい。」「Si-Zogzog と娘は domavak に歩み寄り、中をのぞき見ると、焼けたように黒い顔の男がいた。Si-Zogzog は言った「帰ろう娘よ、ここは怪しいから。」「Siaman-Keynaban は言った「何だって友達よ、まだ娘を連れ帰ってはだめだ。」「Si-Zogzog と娘は石階段のところに留まった。ついに Siaman-Keynaban は息子を連れ出した。息子は椰子の油で体をこすってきれいにし、正装した。正装し終えんと、胸飾り ovey

図1. 家屋配置図

図2. 4門vahay平面図

図3. 4門vahay断面図

を身につけた。「どうだ息子よ、何か忘れてないか。」「いや、なにも忘れてない。」Siaman-Keynaban は dosarey から sesdepan に出た。「もういい友達よ、さあ入ったらいい。」「どうやって入ればいい。」「domavak から入ったらいい。」Si-Zogzog は入って最初に tomok を見た。「娘よ、もう入ったらいい。おまへの友達がここにいるから。」そうして娘は sesdepan を踏みつけて入った。Iraralay 村から来た娘 Si-Rayos (Si-Zogzog の娘) は美しかった。彼女は最初に Si-Keynaban (Siaman-Keynaban の息子) でなく、raranugan を見た。Si-Keynaban は顔立ちがよいから、彼女は父親から離れて彼のところに行き一緒に立った。彼らは輝いていた。その後、彼らは食事をした。Iraralay 村から来た娘は帰りたくなかった。もう彼から離れたくなかった。そうして彼らは別の vahay をもった。¹⁹⁾

門の名称を dosekez, do espanid, domavak, dosarey としていることから、この vahay が 4 門 vahay と分かる。息子を tomok の後ろに隠したとあるが、後に domavak の門を通して若い二人が出会うことから、それは大 tomok と考えられる。Si-Zogzog が dosekez の門から中を覗いたとき、そこに暗がりを見る。do espanid の門から中を覗いたときそこに黒い魚のような人を見、domavak の門から中を覗いたときは黒い顔の男を見ている。それら三つの門から見た vahay の内部は暗く怪しいものであった。Si-Zogzog と娘は中に入ることができず、帰ろうかと考える。そのように躊躇する場所は vahay の内部と外部の中間的領域 sesdepan である。最終的に vahay の内部へ domavak の門から入るよう促され、そこから入ることとなる。Si-Zogzog は domavak の門から入り、最初に大 tomok を目にする。娘は domavak の門から入り、最初に raranugan を目にする。domavak の門を通してまず大 tomok と raranugan がたち現れ、そうして正装した息子がたち現れる。若い二人は出会い、ともに立つ。二人が輝かしい夫婦としてともに立つ場所は、大 tomok の建っている dovahay の domavak である。このとき最も内的な領域である dovahay は外部のものであった他集落の娘を迎え入れる場所となり、domavak は dovahay の大 tomok のそばにいる青年へと娘を導く通路となる。

ところで、こうした domavak における海一山方向の結びつきは、ヤミ族の生活にも具体的にみることができる。たとえば、主屋落成礼のなかに敷地継承者を村の内外に周知させる maparaka という儀式があるが¹⁶⁾、これは息子が大 tomok の前に立った家長と向かい合うようにして立ち、miparaka という輪を家長の肩に襟のように掛けるといものである。ここでは、息子と家長と大 tomok とが dovahay の domavak に海一山方向に重なって結びつき、敷地継承が執り行われるのである。また、日常の寝・食でも家長が domavak に定位する仕方をおして、家長と大 tomok との海一山方向の結びつきをみることができる¹⁷⁾。domavak における海一山方向の結びつきは、大 tomok、そして家長と連関していると考えられる。それでは、そうした大 tomok や家長と連関してたち現れる海一山方向の通路とはいかなる意味をもつのであろうか。神話では、海一山方向は天界から山頂と海岸に落とされた二人の祖先の出会う軌跡として語られている。とくに洪水神話では、山は海から逃れる最後の場所として、また祖先の誕生する最初の場所として、常にヤミ族の依り処であり不動性を有した場所であった。また、海はそうした不動性を根底か

ら揺るがす否定性を有した場所であった。domavak において海一山方向にたち現れる通路は、家長や代々受け継がれてきた大 tomok と連関しつつ、そうした祖先誕生からの軌跡を発ち現し、不動性を有した山を発ち現すのであろうか。ここではこうした推測を保留しつつ、海一山方向の通路を成立させる場所 domavak の意味から明らかにしていきたい。まず、vahay 建造における domavak という場所の形成に焦点を当てよう。

(2) vahayにおける「中心・中間avakの場所」

1) vahay建造過程

ここで取り上げるのは 1995 年に行われた vahay の建造である。建主である Ivalino 村の古老は、もともと 4 門 vahay に住んでいたが、柱などが腐ってきたため新しい 4 門 vahay に建て替えることにした。調査を開始したときは既に vahay の大部分ができあがっており、sesdepan の床、外壁の施工、石垣の修復、棚・炉棚・炉の製作を残すのみであった。以下、古老に聞き取り調査した 4 門 vahay の建造過程を見ていく。

vahay の建造に際してまず行われたのは、minyanyau so ayi no vahay とよばれる儀礼をとまなう柱の製作である。これは主屋落成礼が行われる 3 年ぐらい前に行われる。この木の伐採前には祈りの言葉 toyotoyonen が唱えられ以後の作業が順調にいくよう祈念されるという。またこの柱は前庭 aorod の上で雨ざらしになるため焼却してもよいとされるが、保存がよければ縁柱 ayi no sesdepan として使われるという¹⁸⁾。今回は前廊 sesdepan の dosekez 側壁の柱として使われていた。

材料の伐り出しは主屋落成礼の 2 年ぐらい前からはじめられた。ヤミ族は新築の場合でも前の家屋の部材でつかえるものは継承して使うため、すべての部材を新たに伐り出すことはまれである。まず行われたのは床板 tapi と桁 hatatena、垂木 mipaosokna の伐り出しである。その後 1 年間、主屋落成礼に備えて水田に水芋を植える。水芋の栽培の準備を終えると、山に入り柱の部材の伐り出しをはじめ。その後、古い vahay の解体作業が行われる。

解体作業を終えると、敷地に柱を建てていく。ここで二本の kananarowan とよばれる側柱を建てた後、豚を一匹殺し、手伝いの人たちに肉を分配する。kananarowan は棟木 sapawan を支える側柱で、通常 dosarey では側壁の外側に、dosekez では側壁の内側に位置するように建てられるが、ここではそうになっていない。

次に桁をかけ、親柱 tomok を建てる。それから棟木 sapawan をかける。2 本の tomok (大 tomok・小 tomok) は朝方には建てられる。大 tomok を建てるときは、山羊を縄で大 tomok に繋いでゆっくりと建てなければならないという報告もある¹⁹⁾。また、新しい大 tomok を建てる場合、大 tomok に繋いでいた山羊を殺しその血を大 tomok につける。今回は父親から受け継いだ古い大 tomok であったのでこれは行われなかった。

tomok を建てて sapawan に固定すると、家長が海岸から採ってきた小石を長寿を祈念しながら後室 dovahay の大 tomok、四隅の柱、小 tomok の順にそれぞれの下に囲むようにして置く。これが終わると屋根をかけ、前室 doespanid と後室 dovahay に床桁 ransan を入れる。それから doespanid の domavak に三枚の床板を入れる。そのころがちょうどヤミ族の日暦で吉日の matazin の日になる²⁰⁾。matazin の日の朝早く、家長は銀の兜と腕輪、胸飾り ovey を身につ

け正装し、刀を手に森に榕樹 tapa の枝葉を採りにいく。持ち帰った tapa の枝葉は家長によって長寿を祈念しながら大 tomok 上部の垂木に掛けられる（通常、tapa は tomok 上の棚 miposok に掛けられる）。その後、doespanid の domavak に入れた三枚の床板の上で家長と妻と息子が新しい vahay における初めての食事をする。そして、この日から vahay の doespanid での寝・食や歌²³⁾が可能になる。その後、残りの床板や壁が入れられ、炉の製作を残しつつ vahay は形態上の完成をむかえる。

2) 中心と通路としての domavak

以上が vahay の建造過程である。そこで見たように、大 tomok は建てられるとき山羊を繋げられその血をつけられる。ヤミ族にとって山羊は長寿のシンボルであり、尊ばれる動物といわれている²⁴⁾。tomok の前面に山羊の角 ozon no kagling を彫刻することや山羊の血をつけることはこのことと関係している。実際、Ivalino 村の古老によれば大 tomok は山羊の血をつけられるから命があるという。山羊の血をつけることは大 tomok に命を入れることであり、大 tomok を「vahay の靈魂」pahad no vahay にすることといえる。また、山羊の血をつけるとき家長の唱える言葉が長生きを祈念するものであることから、「vahay の靈魂」大 tomok を建てることは、vahay の存続および家長の長寿と深く連関していると考えられる。ここで興味深いのは、そうした長寿のシンボルとして、山の動物である山羊が選ばれることである。長寿ということが vahay の長く存続することと結びついていることは先に述べたが、vahay の長く存続することは大 tomok がそこに堅固に建てられることを前提とする。そして、大 tomok の堅固さはその根底において大地の不動性に支えられたものである。ここでは大 tomok が建てられるとき、山の動物であり長寿のシンボルである山羊が大 tomok に繋がれ生贄にされることで、不動性を有した山と「vahay の靈魂」大 tomok とが結びつけられようとするのである。

しかし、このように大 tomok が建てられても、いまだそこは「住まう」場所にならない。vahay が寝・食・歌など基本的生活のできる場所になるのは、tapa の式を契機としてである。神話で榕樹 tapa は、主屋 vahay や工作房 makarang が財産を招来し、tapa のように堅固で揺るがず、子々代々伝えるものになるようにという願いとともに語られている²⁵⁾。tapa はそうした家屋の堅固さと継承、さらに長寿への願いと結びついている。そして、それゆえに先祖代々継承してきた大 tomok の上部に家長によって掛けられるのである。また、ここで注目されるのは山から採ってきた tapa が大 tomok 上部に掛けられ、海岸から採ってきた小石が大 tomok 下部に置かれるということである。vahay の堅固さや長寿への願いと結びついたこれらの物がそれぞれ山と海から採ってこれ大 tomok の上下に集められる。これは何を意味しているのだろうか。

そもそも、tomok は「親柱」のほか「盾」という意味を持つ。そして、その派生語である tomoken は「遮る、防ぐ」を意味するといわれる²⁶⁾。これは tomok が何か否定的なものを遮るものとして建てられていることを示している。tomok が三味線の撥のような形をした正面性の強い板柱であるのも、そうしたことの形態における現れかもしれない。さきに vahay の奥行きについて奥に行くほど閉鎖的で内的な領域になることを述べたが、遮るものとしての tomok はおそらく vahay の内・外あるいは奥行きを分節するものとしてあ

るのであろう。それは、tomok を境として、tomok 前方に外的な領域が開かれ、tomok 後方に土間という最も内的な領域が形成されることにも窺える。つまり、tomok が vahay における最も内的な領域を護る形で外的な領域に面することで、内・外の場所秩序が規定され、保たれているのである。ただ、tomok 後方の土間は最も内的な領域というだけの場所ではない。たとえば、土間に関わる次のような神話がある。

Ji-Peygahngen に落とされた石から生まれた人の子孫が言った。

「わたしはあと一ヶ月の命だろう。わたしが死んだら必ず tomok の後ろに埋めてくれ。」彼らは約束した。「十日後わたしを見に来て、わたしはもうそこにはいない。わたしは天界に行くのだ。」十日後彼らは見に行った。しかし彼らが安置した処に彼はいなかった。彼はすでに天界に飛んで行ってしまった。彼は死ぬ前に行った「この世界はもう終わりだ。我々は長生きしすぎたし、おまえたちも多くなり過ぎた。まもなくおまえたちは私の後を追うだろう。海が山に迫り、おまえたちも少なくなるだろう。」それが最後の言葉だった。彼が言い終えると、突然地震が起こり、洪水が起こった²⁷⁾。

神話において土間は、死者が埋葬される場所として、さらにその死者が天界に飛び立つ場所として語られている。土間は、最も内的な領域であるが、ときに死や天界という超越的な外部と結びつく領域でもある²⁸⁾。最も内的な領域が最も外的な領域にもなるといえる。そして、そうした超越的な外部と結びつく土間の位置が tomok の後ろに指定されているのである。上の神話でさらに注目されるのは、tomok において規定された内・外の場所秩序が崩れるとき、すなわち最も内的な領域である土間が最も外的な領域になるとき、洪水という世界の危機が重なって起こるということである。vahay における内・外のせめぎ合いは、洪水における海と山とのせめぎ合いと連関しているのである。そして、そのせめぎ合いのただ中に建てられているのが tomok である。

ここでようやく、山から採ってきた tapa が大 tomok 上部に掛けられ、海岸から採ってきた小石が大 tomok 下部に置かれ、vahay の堅固さや長寿への願いが祈念されることの意味が明らかとなる。つまり、山と海から採ってこられたこれらの物が、大 tomok 上下に集められることで、大 tomok に大地を根底から否定する海と不動性を有した山とが集積されるのである。このとき、大 tomok において否定性を有した海と不動性を有した山とのせめぎ合いが発ち現れ、内・外の分節の原初的な形態が再現される。ここで大 tomok が遮る前方の外部とは、根源的にすべてを飲み込む否定性を有した海である。そして、大 tomok の背後にあるのは不動性を有した山である。さきに大 tomok の堅固さが山の不動性において支えられることを述べたが、山の不動性もまた大 tomok において護持されているのである。つまり、「住まう」場所としての不動性は、大 tomok と山との相補的な結びつきにおいて成立しているといえる。そして、そうした不動性が発ち現れるのは、大 tomok に海と山とが集積され、根源的な否定性を有した海と不動性を有した山とがせめぎ合うかぎりにおいてであり、vahay の堅固さや長寿への願いが祈念されるのもそうした場所においてである。

ところで、tapa の式に関しさらに注目されるのは、doespanid の domavak に三枚の床板を入れる pagayanu so rasaina という建造行為

である。それはこの三枚の床板を入れた domavak が、家長と妻と息子の寝・食・歌の最初の場所となるからである(家長は domavak に入れられた三枚の床板の sarey 側に、妻は sekez 側に、子供はその間に定位する)。ここで domavak に入れられた床板の意味が問題になるが、これに関しては妊婦の在り方が手がかりになる。ヤミ族の妊婦は出かけるときかならず小刀を所持し、畑や路傍に座るときはあらかじめ座るところの地面に小刀で一線を引いてから座するという。また、前庭 aorod に座っていて立ち上がるときも、座っていたところの地面に小刀で一線を引いてから立ち上がるという。こうしなければ、死霊 anito が不意に妊婦を犯し、双子が生まれるからである。これは妊婦と死霊 anito との間に境界線を引き、両者を分離する行為といえる。一方、vahay、makarang、tagakal では床板があるので、死霊 anito に対するこうした注意が不要という²⁷⁾。そもそも妊婦はその胎児とともに身体的に不安定な状態にある。かつて家屋宅地内に産小屋 valag が建てられたのも、そうした不安定な状態にある妊婦を隔離し保護するためであったと考えられる。このとき、多くの禁忌に窺えるように、妊婦から最も遠ざけられるべきものは死霊 anito である。これは妊婦が通常よりも死霊 anito を引き寄せる状態にあることを逆に示している。そのような状態にある妊婦が、家屋内にあっては床板によって死霊 anito から守護されているのである。このことから、doespanid の domavak に三枚の床板を入れた日からそこで寝・食・歌が可能になるのも、そこが床板によって死霊 anito から守護された安心できる場所になるためと考えられる。そして、ここで注目されるのは、そのように安心できる最初の場所に domavak が選ばれるということである。先述したように domavak は、通常の寝・食で家長が定位する場所であり、海一山方向に大 tomok や山と結びつく場所である。つまり、domavak に三枚の床板を入れることは、死霊 anito から守護された場所を形成することであると同時に、海一山方向に大 tomok や山と結びつく通路を形成することであるといえる。ここにおいてはじめて domavak は、先祖代々継承してきた大 tomok が海一山方向に不動性を有して発ち現れる場所となるのである。そしてそのかぎりにおいて、domavak は安心して食べ、眠り、唱うことのできる最初の場所になるといえる。

先述したように、domavak という名称は「中心・中間 avak の場所」という意味である。これまで見てきたように、ヤミ族にとって domavak は、留まり自足することのできる大 tomok や不動性を有した山と結びついた中心であり、同時に祖先の軌跡や、海と山とのせめぎ合いを発ち現す海一山方向の通路である。以前行った神話の考察²⁸⁾ではヤミ族の「住まう」原初的場所として、否定性を有した海と不動性を有した山とのせめぎ合うそのはざまの場所が浮かび上がり、そこはとくに「中心・中間 avak の場所」と解釈された。domavak はそうした神話を背景に、大 tomok や山と結びつく不動性を有した中心として、さらに海と山とのせめぎ合う海一山方向の通路として、その名の通り「中心・中間 avak の場所」と意味づけられつつ設けられるのである。そして、そうした domavak において、ヤミ族は不動性を有した大 tomok や山という中心に自足しつつ、祖先誕生からの軌跡でもあった海一山方向の通路に開かれ、海と山とのせめぎ合いに投げ入れられているのである。

4. おわりに

ヤミ族にとって「vahay の霊魂」大 tomok は、vahay が「住まう」場所である根拠として、あるいは「住まう」人にとっての中心として建てられていた。また山はそうした「住まう」場所を根底から脅かす海に対し、唯一不動性を有した場所として、より根源的な中心であった。大 tomok が「住まう」人にとっての中心となるのも、不動性を有した山に支えられるかぎりにおいてであり、山が不動性を有して発ち現れるのも、大 tomok が建てられるかぎりにおいてであった。そして、そうした大 tomok と山との相補的な結びつきを成立させるのが海一山方向であり、その方向に沿ってある domavak という場所であった。domavak は海一山方向に大 tomok さらに山と結びつく不動性を有した中心として、さらに祖先の軌跡や、海と山とのせめぎ合いを発ち現す通路として設けられていたのである。そして、domavak がそうした場所であるからこそ、そこが主屋 vahay における食べ、眠り、唱う最初の場所にもなったのである。

ところで、ここではあまり触れなかったが domavak は男性側である sarey 側と女性側である sekez 側との境界でもある。海と山とのせめぎ合う中間の場所 domavak は、男性側(sarey 側)と女性側(sekez 側)との中間の場所でもあったのである。domavak の意味を明らかにする場合、そうしたこととの連関も考慮しなければならないであろう。また、家長を通して domavak が海一山方向に延びる通路としてたち現れ、さらに不動性を有した中心として発ち現れることから明らかなように、domavak と最も深い関わりを持つのは家長である。今後、domavak に着目しつつ、ヤミ族にとっての中心と「住まう」こととの関わりを明らかにしていくためには、家長と domavak との連関もより綿密に問うていくことが必要であろう。

註

- 1) 農耕は扇状地を灌漑した水田や畑における根菜農耕が中心で、とくにタロイモ(水田の水芋、焼畑の里芋)、ヤムイモ(畑のだいじょ、はりいも)、サツマイモなどを栽培する。また豆はわずかが焼畑において粟も栽培する。これらのうち、水芋と粟は儀礼において重視される作物である。漁撈は年間を通して行われるが、3月から6月は最も重要な飛魚など回遊魚の捕獲の時期である。この時期、小型船(1~3人乗り)による昼間の漁や、大型船(6~10人乗り)、小型船による夜の松明漁が行われる。ただ近年、大型船の数も減り、夜の松明漁もほとんど行われなくなっている。飼畜は豚、山羊、鶏を飼育し、それらは儀礼や手伝いを呼ぶときに食される。豚小屋は集落の周囲に設けられているが、山羊、鶏は放し飼いにされている。
- 2) 本研究の主な調査対象地で、伝統的集落が比較的良好に保存されている Ivalino 村の現状を以下に示す。Ivalino 村は島の東側の扇状地に位置し、建築物は集落内に集中している。畑・水田には開墾に際して休憩、炊事、道具の保管をするための出小屋が、港には船をおさめておく船小屋が、集落外周部には豚小屋が設けられている。伝統的集落は主に家族集団の家屋宅地と共有の路によって構成されており、家屋宅地は不規則に配置され境界もあいまいである。もともと集落の中心となるような広場や集会施設などはなかったが、第二次大戦後のキリスト教布教にともなって長老教会(プロテスタント)と天主教会(カトリック)の教会堂が建てられている。こうした伝統的集落に隣接するかたちで国民住宅地区がある。国民住宅(国宅)は中華民国政府の同化政策によって6集落に無償で提供された鉄筋コンクリート造の住宅である。この地区では斜面を棚田状に造成し、コンクリートの道を規則正しく巡らして国宅が配置されている。現在、若者の多くは国宅地区で生活し、老人は伝統的集落で生活している。国宅地区の側方には小学校の分校が建てられている。また、集落前方には島を巡ることのできる環島公路が通っており、それに沿っ

- て店舗や鉄筋コンクリート造の住宅が建てられてきている。こうした集落の辺縁には墓地・棄穢地・泉などがあり、とくに墓地はヤミ族にとって死霊 anito と関わるものとして、タブーの場所とされている。
- 3) ここでいう場所論とは、人と場所との具体的な関わりあいの現象を解釈し、そこに発ち現れる場所の意味を明らかにする試みである。
- 4) この海方向 teylaod と山方向 teyrala は、オーストロネシア語族系の諸文化にひろく見られる「la'ud: 海の方角」と「daja': 内陸の方角」という相対する2つの方位名称に由来するともいわれる。
- 三富正隆:「台湾ヤミ (Yami) 族における空間認識と世界観の変容」、『地理学評論』, 66A-8, pp.439-459, 1993, pp.440 参照
- 5) ヤミ族は死亡した人間の霊魂である死霊 anito を信じている。死霊 anito は悪霊を意味する場合と祖霊を意味する場合があり、死体や喪に服している家族を指すこともあるなど、複合的な意味を有している (祖霊をとくに komiln ということもある)。anito がヤミ族の生活を規定する重要な観念であることは、既に多くの研究者によって指摘されている。それらの報告によれば、人間の身体には霊魂 pahad が宿っており、霊魂の一部が浮遊し離脱すると病気に罹り、悪くすれば死亡して anito になるという。
- 6) ヤミ族の神話や海一山方向については拙稿で場所論的考察を試みている。足立崇・西垣安比古・前川道郎:「台湾ヤミ族における神話と『住まう』こと」、『日本建築学会計画系論文集』, 514, pp.257-262, 1998
- 7) 乾尚彦:「バシイック諸族の研究 その2 蘭嶼ヤミ族における居住空間の展開」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』, pp.13-14, 1986
- 8) 背もたれ石 pananadngan は海に向かって座れるように立てられており、通常は休息の場所として使われるが、葬儀に際して死体をそこに安置するという報告もある。また死者が出るとその石をひとつ倒すということも行われ、何らかの象徴的意味を有すると推測される。しかし、その意味は明確には伝承されていない。
- 關華山:「雅美族の生活實質環境與宗教理念」、『中央研究院民族學研究所集刊』, 67, pp.143-175, 1989, pp.158 参照
- 9) 乾:前掲書 7)
- 10) ヤミ族の主屋落成礼については拙稿で場所論的考察を試みている。足立崇・西垣安比古:「台湾ヤミ族の主屋落成礼ー儀礼としての『住まい』建設ー」、『民族藝術』, 13, pp.134-142, 1997
- 11) 董瑪女:「野銀村工作房落成禮歌會 (中)」、『民族學研究所資料集編』, 4, pp.1-111, 1991, pp.30 参照
- 4 門 vahay の名称に関わる tangbad とは、4 門 vahay の doespanid と dovahay の敷居に位置する腰壁で、4 門 vahay においてはじめて設けられる。通常、親柱 tomok や棟木 sapawan と同様の儀礼をとめない製作され、相続や分配においても親柱 tomok と同様に重視される部材である。
- 12) Ivalino 村、Iranumilk 村、Iralalay 村では do espanid といわれるが、島の反対側の Imorod 村、Iratay 村、Yayu 村では dobosongaran といわれる。Benedek (1987) によれば do espanid は「2 番目」という意味である。ここでは同名の前室 doespanid と区別するため、門に規定された場所の方を do espanid と表記している (do は場所を示す格)。ちなみに、dobosongaran は「名称がない」という意味である。
- 13) 乾尚彦:「地域小集団による建築生産の研究ー蘭嶼の居住空間ー」、『住宅建築研究所報』, 11, 337-351, 1985b, pp.344 参照
- 14) 乾は「valag・nijingging 型の住居の主室、cinangbadan 型の住居の後室部分は、dovahay と呼ばれている。do は場所を示す一種の接頭辞、vahay は家を示す最も一般的な語である。このことは、本来の住居が dovahay 部分であって、他の空間は住居規模の拡大のために後に付加されたものであることを示唆している。」と推測している。
- 乾尚彦:「蘭嶼・ヤミ族における居住空間の成立過程」、『民俗建築』, 89, 19-28, 1985a, pp.24 参照
- 15) Benedek Dezso: A COMPARATIVE STUDY OF THE BASHIIC CULTURES OF IRLA, IVATAN AND ITBAYAT, a Dissertation in Comparative Literature, The Pennsylvania State University, 1911pp., 1987, pp.550-556 参照
- 16) 乾:前掲書 7)
- 17) 足立崇・西垣安比古:「台湾ヤミ族における『住まう』ことの場所論的考察 2」、『日本建築学会九州支部研究報告』, 35, 3, pp.441-444, 1995
- 18) 乾:前掲書 13) pp.349 参照
- 19) 方鏗雄:「蘭嶼雅美族傳統住居建築之研究」, 私立淡大建築研究所碩士論文, 163pp., 1984, pp.158 参照
- 20) ヤミ族は一月を 30 日で数える。matazin という日はその 8 日目にあたる。古老によれば、この日は出産や結婚、死などに適しているという。
- 21) 主屋落成礼では vahay において家長を中心とした歌会が開かれる。これは集落内外の客人が参加するもので、昼に始まり、食事などをはさんで夜を徹して行われる。乾は、「床板がある程度できると落成礼のための歌の練習が始まり、寝泊まりもできるようになる」(乾:前掲書 13) pp.351 参照) という。実際、三枚の床板が入れられると家族で毎晩のように歌が唱われる (ときに古老も招かれる)。しかし、これを歌の練習としてよいかは不明である。ただいづれにせよ、歌が vahay を「住まう」場所とする上で、寝・食と同様に重要な行為であることは確かである。ちなみに、皆川によればヤミ族は言語に対して特殊な信念を持っており、ある特定の悪口などは死の隠喩として強く拒否されるという。落成礼における歌の歌詞もこうしたことと関わって、非常に気を使わねばならず、相手や自身を誉め過ぎた歌は不適切であり、毀誉双方の歌を唱わなければならないという。
- 皆川隆一:「言葉の槍ーヤミ族の言語観ー」、『三田文学』, 7, pp.17-25, 1987
- 22) 鹿野忠雄:「紅頭嶼ヤミ族の山羊の崇拜に就いて」、『人類学雑誌』, 45(1), pp.41-45, 1930
- 外山卯三郎:『ヤミ族の原始芸術』, 造形美術協会出版局, 346pp., 1970, pp.99 参照
- 方:前掲書 19) pp.40 参照
- 鹿野は「大昔、羊頭の人が、南洋から来て、はじめに小紅頭嶼を創り、それから、此の紅頭嶼を創って、又南洋の方に帰って行った」という神話を挙げ、超人間的な行為をする神話的人物に山羊が関係していることも指摘している。山羊頭の人の話は許世珍:「雅美族紅頭社傳説一則」、『中央研究院民族學研究所集刊』, 9, pp.285-298, 1960 にも出てくるが、そこでは呪術を使って死者をよみがえらせる人物として登場している。
- 23) 劉斌雄:「雅美族漁人社の始祖傳説」、『中央研究院民族學研究所集刊』, 50, pp.111-169, 1980, pp.155 参照
- 24) 同上 pp.141 参照
- 25) Benedek:前掲書 15) pp.237-240 参照
- 26) 土間と天界との結びつきについては、關:前掲書 8) pp.166-167 でも論じられている。
- 27) 鹿野忠雄:「紅頭嶼ヤミ族の出産に関する風習」、『南方土俗』, 5(35), pp.6-17, 1939, pp.8-9 参照
- 28) 足立・西垣・前川:前掲書 6)

(1998年12月9日原稿受理, 1999年3月10日採用決定)